

## 随想 サプールという文化

### 悲劇的環境下にあつて、本物で着飾り、紳士として振る舞う

(株)PPQC研究所 加藤 宏光

著者の長女はDJ(Disc Jockey)を生業としている。先日、某デパートの創業一三〇年記念パーティーの司会を務めた折の話を聞かせてくれた。

松任谷由実さんをゲストとしたパーティーは盛況を極めたそうである。そのパーティーの写真に混じつて、黒人三名によるスマートなパーフォーマンスが目をつけた。いかにもスマートな素振りに感心していると、娘

は「この人たちはプロじゃないよ!」

と話してくれた。

コンゴ共和国は、中部アフリカに位置し、コンゴ民主共和国とカメルーン、中央アフリカ、

ガボン、アンゴラに接している。かつてコンゴ民主共和国とアンゴラ北部はコンゴ王国に属していたが、一六世紀にポルトガル、一九世紀にベルギーとフランスによって支配された。一九六〇〜六四年に現在のコンゴ民主共和国もコンゴ共和国と称していたため、コンゴ共和国はコンゴ・ブラザヴィルと呼ばれ、コンゴ民主共和国はザイル共和国と称していた(一九七一〜九七年は単にコンゴと称していた)。

一九九〇年以降ダイヤモンド原石が輸出されているが、正規ルートを通っていないため、紛争ダイヤモンドの疑いが持たれ、世界ダイヤモンド機構では、紛争ダイヤモンドの流通防止の

ため輸出規制を呼び掛けている。コンゴにはサプールという洒落文化が根付いているのだそう。コンゴという国の名前は著者にとつては、少年期に愛読した《少年ケニア》で知った以上に大きく目を引かなかつたが、このようなファッショナブルな文化人のパーフォーマンスを見て、大いに興味を持った。

コンゴ共和国はもとフランスの植民地であり、独立した今でも一日一三〇円で暮らす人々が多し、世界でも最貧国として挙げられる。コンゴは人口四二〇万人のいわば小国であるが、金ダイヤモンド、レアメタル等の地下資源が豊富である。

しかし、これらの地下資源は国民に還元されることなく、国

外のさまざまな勢力に蚕食され、国民は貧困に喘いでいる。貧困に喘ぐなかで《人生をいかに楽しむか》という人生観が込められている。その歴史は古く、九〇年近くも継承されているファッション文化である。先に述べたようにコンゴ共和国はフランス(とポルトガル)の植民地であった。フランスに従軍し、またはフランス人の使用人としてフランスの生活スタイルを体験した人たちによって始まった。

サプールとはフランス語で《おしゃれな優雅な紳士たち》(Societe des ambassadeurs et des personnes)の頭文字を取ったS A P E (サップ)を楽しむ人々(Sapeur)のことで、お

しゃれをして歩くだけの文化ともいえる。

サプールの休日には街に現れ、

①最高に自分を着飾って

②街をステップを踏んで歩く

これだけである。

これだけで、彼らは自分だけでなく町の人々すべてを元気づける。サプールのメンバーにはイブ・サンローランやクリスチャン・ディオールもいるし、ポール・スミスコレクションの基にもなっている。一九七〇年代からサプールのフォーマルな服装をベースとするようになったが、当時は《不良扱い》であった。それから四〇年余り、今ではサプールのあこがれの的となっている。

サプールの裕福な人ではない(有名になり裕福な人もいるだろうが…)。多くのサプールの貧しい暮らしを送りながらお金を貯め、給料の五か月分もする洋服を買い、自分を着飾っている。

日本人写真家の茶野邦雄氏がサプールの文化を紹介している

が、彼の紹介するグラント・サプールのセヴランという陽気なコンゴ人の歴史がサプールの本質を伝えている。

セヴラン氏は最近まで続いた内戦の折(一九九六〜二〇〇三年)にサプールの命ともいえる大切な洋服や靴を、庭に掘った穴に埋めて避難した。二〜三日で帰れると思っていたが長引いた紛争のため、帰宅は一年以上過ぎてから…大事な服や靴は廃棄する羽目になった。このことから彼は平和の大切さを訴えるためのサプールの活動するようになった(もともとコンゴ共和国とコンゴ民主共和国は一つの国であったこともあり、両国共にサプールの発祥の国を主張して譲らない、とか)。

娘の撮っていた動画を見ると、いかにもおしゃれが身に着ているアフリカ紳士が三人、軽やかなステップでエンターテインメントを披露し、自身たちも楽しんでる。

彼らはコンゴ共和国の大使が推薦し、日本だけでなく各国で

サプールの文化を広めている伝道師たちであった。

「サップでいることによって、人生で失った多くのものを取り戻しました。スーツをまとうている時間は天空にいるようで、まるで空を飛んでいるような気分です」。ムイエンゴ・ダニエル六十才、もと公務員。

「人生で一番大切なことは、どんな困難にあつても笑顔でいることだね。かっこいい服装をしてね。それがサップというものだよ」。クリステイ・エンベール、タンクローリー運転手三十三才。

サプールの掟、

①使うカラーは三つまで(原則三色まででコーディネートするのが品良く装う基本)、  
②モラルを重んじることは何よりも大事(どんなときにもエレガントに礼儀正しく振る舞い、他人をリスペクトすること。けんかを売られても非暴力、平和主義を貫くこと)。

サプールのダンディズムを見

て思い出したことがある。著者の若い頃(二十才台の半ばだから、五〇年ほど前になる。まだ豊かではなかったわが国で、一点豪華主義という文化が若者を中心に広がった。身に着けるものあるいは小道具の一つだけ、本物で豪華にする、というものである。

友人はこの文化に染まり、カルチエの金張りライターやイタリア、フランス等の有名ブランドのネクタイやタイピン等本物を持ち、自慢げに披露していたのを思い出す。

当時の日本よりさらに貧しく、悲劇的なコンゴ共和国で本物のファッションで着飾り、紳士として振る舞う。この二者に何かしら共通の郷愁を感じるのは著者のみであろうか!?

エボラ出血熱や、内戦と貧困に喘ぐ、悲劇的に貧しい環境でそれでも苦勞を乗り越え、陽気に過ごそうとするコンゴ人のタフさに大いに共感を覚えた!!